

勇者様にいきなり求婚されたのですが

勇者の仲間達
+
姫

ファラ

レベル : 80
保有スキル : 「防御力強化」、
「回復術」ほか。

.....
女戦士。非常に漢らしい性格。

レナス

レベル : 90
保有スキル : 「精霊の恩恵」、
「防御力強化」ほか。

.....
神官。グリードのストッパー役。

ミリー

レベル : 79
保有スキル : 「解除」、
「隠密」ほか。

.....
女盗賊。グリードとレナスの幼馴染。

ルフアーガ

レベル : 測定不能
保有スキル : 不明。

.....
エルフ。勇者一行の導き
手であり、監視役。

ルイーゼ

レベル : 2
保有スキル : 不明。

.....
シュワルゼ国第二王女。
リュファスの恋人。

リュファス

レベル : 89
保有スキル : 「解析」、「回復術」
ほか。

.....
実はエリューシオン公国第二皇
子である魔法使い。姫の恋人。

アーリア

レベル : 1
保有スキル : 「ツッコミEX」。
(隠しスキル)

.....
ルイーゼ婚付きの侍女。王道や
定番、普通をこよなく愛する。

グリード

レベル : 測定不能
保有スキル : 「精霊の加護」、
「魅了術」その他
いっぱい。

.....
歴代「最強」の勇者で、同時に
「最凶」の勇者でもある。

登場人物
紹介

目次

勇者様にいきなり求婚されたのですが	7
空っぽの心	221
終わりの始まり	245
そして物語は始まる	265

勇者様にいきなり求婚されたのですが

プロローグ

大国シユウルゼの美しいと評判の姫君が魔王に攫われた。

王はすぐさま兵隊を派遣して姫を救い出そうとしたが、魔族の圧倒的な力によって蹴散らされて失敗。

進退きわまった国王は、神託を受けた勇者に力を貸してもらうことにした。

城に集まった勇者一行に国王は言った。

「どうか、どうか、姫を救い出して欲しい。もちろん、褒美はそなたらの好きなものを与えると約束しよう」

「わかりました。命に代えても姫を救い出しましょう」

額いた若者——勇者は、金髪に青緑の瞳をした驚くほどの美貌の持ち主だった。

彼だけではない。彼の仲間の魔法使い、エルフ、女戦士、神官、女盗賊の五人全員がハッと人目を引く容貌をしていた。

え？ 顔？ 顔で選ばれた？

この場に居合わせた宰相、大臣達、そして姫の侍女Aは思わず頭の中でツッコんでいた。

だが彼らは顔がいいだけではなかった。顔も良ければ実力もあるパーティだったらしい。

勇者一行は人々の（主に女性の）歓声を受けつつ出発し、姫君を救い出して凱旋したのだ。

しかも、魔王まで倒して。

「おお！ よくぞ無事に姫を取り返してくれた！」

娘と感動の再会を果たした王は上機嫌で言った。

「嘘偽りは申さん。そなたらの望む褒美を与えよう！」

この時、広間に集った人々は期待していた。

三国一といわれるほど美人な姫君と、彼女を魔王の手から救い出した勇者。並んでいる姿はまるで絵画のように美しく、誰もがお似合いだと感じたからだ。

きつと、お決まりの物語のように二人の間には恋が芽生えたに違いない。芽生えないわけがない。だから、勇者は褒美として姫を求めてくるだろう。

そして二人は結婚していつまでも幸せに暮らしました、となるに違いない。

王の言葉を聞いた勇者は、光の具合で青にも緑にも見える瞳をきらめかせ、真剣な眼差しを玉座に向けて言った。

「では、この国から花を一輪、私が持ち帰ることをお許しください」
キター！ と、誰もが思った。

もちろん、ここで言う「花」は姫君のことだ。

「うむ。許す。許すぞ」

王は何度も頷いた。

「もちろんですとも」

王妃も顔をほころばせる。

「ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべた勇者は優雅に一礼し、愛する女性の下へ向かった。

そして彼女の前で歩みを止めると、青緑の目に愛しさとやさしさを込めて言った。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」

——と。

——姫の侍女Aの手を取りながら。

1 勇者様の求婚

初めまして、こんにちは。

アーリアと申します。

侍女Aです。

子爵家の娘で、行儀見習いを兼ねてこのシュワルゼ国の第二王ルイーゼ様の侍女を務めております。

つい先ごろ魔王に攫われた姫様が、勇者の手によって救い出されて無事に城に帰還しました。

大変喜ばしいことです。姫様の無事を願って毎日毎日神に祈りを捧げてきた甲斐がありました。

——ですが。

どうなっているんでしょうか、この状況は。

目の前にはキラキラと後光が差すくらいに美しい容貌の男性。

その彼——勇者、グリード様がどういうわけか私の手を取って言ったのです。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」と。

周囲はビックリです。王様など、仰天のあまり玉座から立ち上がったくらい。だけど、一番ビックリしたのは私です。

貴方は姫様にプロポーズするんじゃないんですか!?

それなのになぜ私の前に立って、手なんか握っているのでしょうか……

——姫様。

そこで私はハッとしました。

そうです。この場面を見て姫様はどれほどショックを受けていることでしょう。勇者様が自分をスルーして、自分の侍女にどういうわけか求婚しているのですから。

私は手を取られたまま、グリード様の肩越しに姫様の方を窺うかがいました。

するとどうでしょう。姫様はこちらなんて見てません。ひたすら、長い黒髪に茶色の瞳を持つこれまた美形な男性、勇者様一行の魔法使いとじっと見つめあっているではありませんか!

うっすらと頬を染めたそのお顔は、恋してる乙女そのものです。

ちよ、なぜ王道の勇者様ではなく魔法使いと恋に落ちてるんですかあ!?

わけがわからなくなつて、思わず周囲に視線を走らせた私は気付きました。広間にいる者達はこ

の事態に驚いているのに、勇者様一行の方々は誰も驚いていないことに。

それどころか、皆様こつちを見ていらして、

「頑張れよ、グリード」

「そうそう。ガンガンいっちゃえ!」

「結婚式はぜひとも僕に執とらせてくださいいね」

とか何とか煽おほっています。ちなみに発言は女戦士、女盗賊、神官の順です。

私は彼らのこの言葉を聞いて、勇者様が私を好きだというのは、パーティーの間では既知の事実であることを悟りました。

どうやら突発的に、おかしくなつての行動ではないらしいです。

……困りました。

魔王の呪いか何かで、私なんぞに求婚しているという状況の方が何倍もマシです。

正気に戻れば、このプロポーズはなかったことのできるのですからね!

ですが、彼らの様子ではそれはなさそうです。勇者様は正気で、それも本気らしいです。

私は恐る恐るグリード様を見上げました。

「あ、あの正気ですか?」

わずかな希望を求めて聞かすにはいられませんでした。

「もちろんです。貴女を愛しいと思うこの気持ちに嘘偽りはありません」

……即答されましたが。

嘘偽りであつて欲しかったです、勇者様。

けれど、どうやら勇者様の「花」は自分らしいです。

さつきはキラキラの後光に邪魔されて気付きませんでした、長い睫毛の下からのぞく青緑色の目は、蕩けそうな熱視線を私に送っています。

本気で困りました。

なぜなら私は、その他大勢の中の一人。

「モブキャラ」なのだから——

2 侍女Aの困惑

モブ。それは幾多の物語に必ず登場する雑魚キャラ。その他大勢。脇役ですらない、名もない存在。

巷に溢れる勇者物語の類の小説などでは通常、主役や準主役以外は名前が出てきません。その他大勢の雑魚キャラは、すべて職業で表されているのです。

大臣ABC、騎士ABC、兵士ABC、侍従ABC、などなど。

下手をすると「大勢の兵士達」とか「使用人達」、はたまた「広間に集った民衆」と、括られて

しまう場合もあります。

もちろん、勇者物語には出てこなくても、実際には名前が存在しますけどね。雑魚キャラでも生きて生活していますから、名前がなくては困ります。

私もそんなモブキャラの一人に相当する人間でした。

この当代勇者物語において私に与えられた役割はさしずめ「姫様の侍女A」といった役どころでしょう。

姫様が魔王に攫われる場面を目撃して、

『姫さまあああ！』

と絶叫し、王様や大臣達に、

『姫様が、姫様が魔王に——!!』

とパニックになりながら報告するのが役目。

実は何代か前の勇者物語でも、とある美姫が魔王に攫われたことがありまして、その際にも同じようなことをやりました——先代の侍女Aさんが。

そして私もそれに倣いました。いや、なりましたというべきでしょう。

ちなみに、魔王は人型ではありませんでしたが、美形ではありませんでした。はつきり言つてがっかり

です。

美形なのが定番ってもんでしょう？　なんで中年の冴えないオッサンなの！
と姫様を抱きかかえている自称「魔王」を見て、私が思ってしまったのは誰にもナイシヨです。
ついでに言うなら、普通魔王なら配下の者に命じて攫さらわせるだろうに、なぜ自ら単独で攫さらいに来たんだらうかと内心ツツコミを入れてしまったのもナイシヨです。

まあ、それは置いておいて、私の勇者物語における役割はそれでほぼ終了してしまいました。
あとはひたすら姫様の無事を神に祈りつつ、主人のいない部屋をいつ帰ってきてもいいように整えるだけの毎日。

モブですから、やれることは限られてるんです。でもそんなモブ生活に満足していました。
だって、主役や脇役である勇者様一行は、私が心を痛めつつもどこかのほぼんと過ごしている間、
姫様を救うべく魔王と戦う日々だったに違いありません。

考えただけでもゾツとします。私には戦うスキルなんてありません。いえ、くれると言われても
いません。私はモブで十分なんです。

ええ、誰がなんと言っても、侍女Aでいいんです！

だから、勇者様に求婚されるのは非常に、非常に困るのです。

だって、平凡そのもので、勇者様の妻になるスキルもステータスも持ち合わせていないのですか
ら！

私はグリード様に手を取られたまま、ダラダラと冷汗が出るのを感じました。

周囲の視線も驚愕きょうがくから「あの女は誰だ？」という何やら険のある視線に変わってきたような気が
します。

それはそうでしょう。美しい姫様に求愛するのとかばかり思っていた勇者様が選んだのが、冴さえ
ない侍女だったのですから。

「あ、あ、あ、あの、どうして私なのでしょか……？」

ルイーゼ姫様は誰もが振り返るような美女。その美女と国に凱旋がいせんするまでしばらく一緒に旅をし
ていたのですから、好きになるのが当然の流れというもの。

なのに、この目の前の勇者様ときたら姫様には目もくれず、容姿も器量も普通の侍女に求婚して
いるのです。

誰もが思ったことでしょう。

なぜお前なのだ。

勇者様は淡い笑みを浮かべ、私を見下ろして言いました。

「この城に招かれた折、ルイーゼ姫を心配する貴女を見て一目で惹ひかれました。正直、魔王に関する
情報が少なくて、あの段階では直接魔王とやり合うのは時期尚早だと思っただけなんです。ですが、
貴女の姫を救って欲しいという言葉に私は決心しました。貴女のために姫を救い出そうと」

姫を救って欲しいという言葉……



ええ。確かに言いました。言いましたとも！
城に到着してすぐの勇者様に、『お願いです！ 姫様を、姫様をお救い下さい！』って、縋った
のでしたっけ。

勇者様は勇者様らしく、縋る私を抱きとめて微笑みながら「大丈夫です」「貴女の姫君は必ず助
けます」と言ってくれました。これが世界を救う勇者様の役割なので、特別なことでは
ありません。

私が勇者様と直接言葉を交わした（と言えるのかどうかはともかく）のは、あれだけです。
勇者様が王様に謁見しにいらした時の広間には私もいましたけど、あの時の私に個人的な発言権
はなかったのですから。

ということ、あの縋った時に見初められたということでしょうか？
でも、あれは侍女Aとしての役割のうちだったと思うのですが……
だってあれってお約束の台詞せりふですよ？

それなのにまさかあんなテンプレ発言で勇者様がやる気を出して、姫様を救いに行ってくれると
は。まして、恋愛フラグが一方的に立つとは。

——世の中何があるかわかったもんじゃありません。

「旅をしている間、ずっと思っていました。姫を救い出すことができたなら、貴女を……」
グリード様がひと際甘く私を見つめてきます。

私の背後にいる侍女仲間、つまりモブ仲間がザワついて「勇者様、素敵」とか何とか言っているのが耳に入りました。

私の近くにいる彼女らは、この勇者様の魅^{チャーム}術である美形キラキラ光線のとりこになっているでしょう。

でもツツコミ入れていいですか？

……ろくに話したこともないのに、いきなり求婚だなんて早くないですか？
ものすごく色々すつ飛ばしてないですか？

「ひ、姫は、姫はどうなるのだ？」

たまらず王様が玉座からよるよると前に出て叫びました。どうやら我に返ったようです。

そして、勇者様に姫様を嫁がせる気満々だった王様はひどく憤慨^{ふんがい}されている様子です。

きっと勇者様が姫様の気持ち^{もよおせ}を弄んだように思ったのでしょうかね。

でも、肝心の姫様の様子は見えていないようです。いまだに黒髪の魔法使いと頬を染めながら見つめ合っているというのに。

そして当の勇者様は王様の言葉を完全に無視しました。

私を熱心に見つめるだけで、聞こえているだろうに王様の方をちらりとも見ません。

「ルイーゼ姫？ ルイーゼ姫には、リュファスがいるでしょう？」

代わりに答えたのが、エルフの青年、いえ、あの背格好は少年でしょうか、でした。

彼は持っていた杖^{ええ}でホラとばかりに見つめ合う魔法使いとルイーゼ姫様を指しました。魔法使いはリュファスという名前だそうです。

そこでようやく王様は姫様の様子に気付いたようです。

「ひ、姫、これは一体……？」

王様の言葉に、姫様達は一瞬だけ王様を見ました。

だけど、すぐに視線をお互いに戻してしまいました。不安そうな表情になるルイーゼ姫様に、魔法使いが安心させるようにやさしく微笑んでいます。

美形の微笑みは威力抜群です。

侍女仲間が私の背後で「キャー」と黄色い声を上げています。

貴女方は美形ならなんでもいいんですか……？

いえ、勇者様に手を取られて求婚されているという状況でなかったら、私もあの黄色い声をあげた集団に交じっていたかもしれません。なのでツツコミ無用です。

魔法使いはもう一度姫様に微笑むと、その手を取って玉座に向き直りました。

勇者様に負けず劣らずの美形な魔法使いです。姫様と並ぶと、それはそれは絵になります。

周りの人達もそう思ったらしく、「ほう」と感嘆^{かんだん}のため息がさざ波のように広がりました。

そんな中、魔法使いが言った言葉に、広間は騒然とすることになります。

「私はエリューシオン公国の皇子、リュファス・リクリード・エリューシオンです。シュワルゼ国王陛下、ならびに王妃陛下にお願い申し上げます。どうか、私とルイーゼ姫の結婚をお許しください」
私の手を取ったままの勇者様の背後で、ベタな展開が繰り広げられたのでした――

3 関係のないところで王道展開

魔法使いリュファス様の言葉が広間に朗々と響き渡りました。

その直後、彼の言っていることの意味を理解した人々がざわめき始めました。

なんとリュファス様はエリューシオン公国の皇子だということです！

それが本当なら、なんておいしい……ではなくて、素晴らしい話なのでしょう。

私は主の僥倖まがまががうれしくなつてルイーゼ姫様に目をやりました。が、そこでビックリです。いえ、ビックリなのは私だけではありません。当の姫様までもが目を見開き、リュファス様に驚愕きょうがくの視線を注いでいるではありませんか。

ちよ、もしかして姫様も今の今まで知らなかったのですか？

ただどそれなら先ほどの不安そうな姫様の表情も頷うなずけます。

きつと姫様はリュファス様をただの魔法使いだと思っていたので、王様たちが自分たちの結婚をよく思わないのではないかと不安だったに違いありません。

神託を受けた勇者様ならともかく、一介の魔法使いに嫁ぐのを王様は良しとしなかったでしょうから。

「エリューシオン公国の皇子、だと？」

王様は信じられない、といった表情でリュファス様と、彼に手を引かれている姫様を見ました。

エリューシオンは同じ大陸にあり、わがシュワルゼより大きな、とても力のある大国です。少し遠い場所にあるため、国交はそれほどありません。

そういえば、私の目の前にいるグリード様も、その出身だという話をどこかで聞いたことがあるような気がします。

「エリューシオン公国の皇子がなぜ、勇者の一行に魔法使いとして参加しているのだ？」

王様が誰もが疑問に思っていることを尋ねます。

「そういえば、聞いたことがあります。かの国の第二皇子であるリュファス皇子は魔術に長けた人物である」と

そう発言したのは、外務大臣でした。長年外交官をしていて、外国の事情に通じている人物です。その彼が言うのなら、目の前にいる魔法使いがリュファス皇子であってもおかしくないのかも

れません。

「説明しましょう」

そう言ったのは、当のリュファス様でした。

「私とグリードは幼友達なのです。ですから魔族が台頭してきて、グリードが勇者として女神の神託を受けたと聞いた時、私にも何か彼を手伝えることがないかと思つたのです。幸い私には魔力があつたので、魔法使いとして彼の一行に加わることができました」

リュファス様はそこまで言うと、向き直つて愛しそうに姫様を見下ろしました。

「皇子であることを黙っていてすみませんでした、姫。ですが、勇者パーティーの一員である私は皇子ではなく、あくまで魔法使いリュファスという立場のつもりでいました。それに……これは私の方がままですが貴女に大国の皇子ではなく、リュファスとして愛して欲しかったのです。皇子としての自分ではなく、ただの男としての私を……」

「リュファス様……」

ルイーゼ姫様の大きな目にたちまち涙が浮かび、真珠のようなその雫がぼろりと零れました。ですが、私にはわかりません。あれは悲しんでいるわけではないのです。

その証拠に、姫様はその顔に笑みを浮かべようとしているではありませんか。

「わたくしが好きなのはリュファス様その人ですわ。皇子でも魔法使いでもどっちでもかまいません。そんなのは些細なことです。ここにいるただの男の貴方を、わたくしは愛しているのですから」

「姫……！」

リュファス様は感極まつたようにつぶやくと、姫様をぎゅうと抱きしめました。

そのリュファス様の背中に、おざおざと姫様の手がまわり、リュファス様のローブをきゅつと握り締める様が実に初々しいです。

私はその光景をグリード様に依然として手を取られたまま、グリード様の肩越しに目撃しておりました。

すごいです。主役であるハズの勇者様の背後で、その主役の座を脅かすようなベタで王道な恋物語が展開されているのですから。

そう。要約するとこんな感じで――

『とある国に大いなる魔力を持った皇子がいました。

ある日、皇子の大切な幼友達が勇者の宣託を受けたということを知ります。

彼は幼友達のために皇子としての自分を捨てて、魔法使いとして勇者の一行に加わりました。

そして、出会ったのが魔王に攫われていた美貌の姫君。

勇者一行は姫君を救うために魔王と死闘を繰り広げ、ようやくのことで姫を救い出すのです。

その過酷な旅の中で、魔法使いと姫君は恋に落ちました。

皇子という身分を明かさずとも、惹かれあう二人。

やがて一行は姫の国に凱旋して、魔法使いは姫の父親である王様に姫を請います。

その時になってようやく魔法使いは身分を明かすのです。自分は皇子だと――』

おおお、なんたる王道展開なのでしょう！

一気に場の主役が代わりました！　というか、もうこのどさくさのうちにグリード様が私に言ったことは忘れてもらえないでしょうか！

だって、侍女Aに求婚する勇者様より、ずっとずっと見栄えがするんじゃないですか？

そんな事を考えていたら、不意に私の手をつかむグリード様の手に力が入りました。

「痛っ」

と顔を顰めた私に、グリード様が言いました。

「見てはダメです」

「は？」

失礼なことを考えていたのがバレたのかと思わずグリード様を見上げた私の目に飛び込んできたのは、真剣な眼差しで私を見下ろすグリード様の表情でした。

相変わらずの美形です。

ですが、その視線はさつきまでの甘いものとは違って、何やら炎が燃え上がっているように感じられて仕方ありません。

きゅっ。

また手に力が入ります。

今度は痛くはありませんでしたが、妙に力の込もったその手に威圧感を感じずにはられませんでした。

「私を見てください。その瞳に、別の男を映してはいけません」

「——は？」

一瞬、何を言われたかわかりませんでした。

けれど、余所見をしていたのが気に入らないのだということをはかろうじてわかりました。

……リュファス様に見惚れていたわけではないですよ!?

「ル、ルイーゼ姫様とセットでもですか……?」

恐る恐る言った私に、グリード様はふるふると首を横に振りました。

「セットでもダメです。他の男は見ないで下さい」

他の男って……。貴方の仲間で幼友達じゃないんですか……??

——どうやら勇者様は思いのほか嫉妬深いらしいです。

4 空気は読めますが、返事は玉虫色です

グリード様の嫉妬だかなんだかよく分からない妙な威圧のおかげで私はリュファス皇子やルイーゼ姫様を見てはいけないような気になってきました。もちろん、それに対する王様たちの反応も。ですが、勇者物語の主役が私の手を握ってまったく違う方を見ている間にも、話は進んでいきます。

「真のリュファス皇子なら、反対する理由はない。いや、もし王族でないとしても、娘が嫁ぎたいと望んだ者のところに送り出してやるのが親というものだ」

王様の言葉が広間に響き渡りました。その言葉に呼応するように、王妃様の優しい言葉が続きます。「そうですね、姫。貴女を救い出してくださった方々ですもの。たとえ、皇子ではなくただの魔法使いであったとしても、わたくしは貴女の恋を応援しますよ。リュファス様、娘をどうかよろしくお願い致します」

「お母様、お父様……」

「国王陛下、王妃陛下。ありがとうございます」

この様子だと姫様とリュファス様の結婚は許されるようです。

さすがに賢王、賢妃と呼ばれる国王夫妻。懐が深いです。

……まあ、本当に一介の魔法使いだつたなら、こうして諸手をあげて賛成したかどうかはちょっと怪しい気もしますが。そこはそれ、つまらないケチはつけずに、素直に喜びたいと思います。

広間のあちこちから「姫様おめでとございませう」「お幸せに」という言葉が二人に掛けられました。歓声や拍手まであがっています。すっかり広間中、リュファス皇子とルイーゼ姫様の結婚大歓迎ムードです。

ほんの少し前の戸惑いや驚愕の雰囲気は一体なんだつたのかという感じで、今はこの王道恋愛ストーリーがまさに成るべくして成つたような、皆それを待ち望んでいたかのような晴れやかで和やかな空気が流れております。

みんな切り替えが早いです。さすが城勤めをしているだけありますね！

かく言う私もグリード様に手を取られていなければ、率先して拍手をしていたと思います。

だって、私は侍女歴六年ですから。空気を読むのは得意なのです。

だけど……私の目の前にいらつしやる方は、空気は読まないみたいです。いえ、あえてのスルーですか？

食う気嫁！

あ、間違えました。

空気読め！

だけど、魔力ゼロの私の念は勇者様には届かなかつたようです……

自分の背後で幼馴染でもある仲間、しかも自国の皇子が伴侶を得ようとしているのに、ちらりと

も視線を向けません、グリード様。ずっと私の顔をガン見です。穴が開きそうです。

平凡なモブの顔を見ても何の面白みもないと思うのですが……毛穴の数でも数えているのでしょうか？

——と、いささか私が現実逃避しているのは、はっきり言って恐いからです。

私が視線を姫様（とリュファス様）に向けなくなってから、グリード様の私を見つめる視線に甘さが戻ってきたのですが、さっきの妙に昏い炎を宿した瞳を見てしまった身としては、それすらも「恐ええええ！」という感じですよ。

蛇に睨まれたカエルのような心境です。

なのに、ああ、なんということでしょう。空気を読めてしまう自分のスキルが初めて煩わしく思えてきました。

姫様とリュファス様の王道展開を堪能した人々の関心が、ふたたび私と勇者様に集まってきているのが分かってしまうのです！

「そういえばこの二人はどうなった？」みたいな感じで！

勇者様以外見てなくても、そんなものは空気で感じ取れます。

王道展開を見てめでたい雰囲気に触れちゃった人々の頭の中で、こっちもしかるべき結果であるべきだ、みたいな期待する空気が！

きっと皆様の頭の中では「姫を心配する心優しい侍女と、その彼女のために魔王を倒して姫を救きつと皆様の頭の中では「姫を心配する心優しい侍女と、その彼女のために魔王を倒して姫を救い出した勇者の恋物語」みたいな話がきちちゃっているのでしょう。
なんてお花畑な……いえいえ、前向きな解釈でしょう。
その「心優しい侍女」が自分でなければ、きっと今頃私の頭の中にもお花が咲いていたかもしれないね。
なんて変わり身の早い……と心の中でツッコミを入つつも、周囲の空気に迎合していたことでしょう。

でもこんな空気は読みたくありませんでした！

あああ、私はまだ返事をしてないことに気付いて「よもや断るわけないよね？ 勇者様の求婚を」「まさかね」「勇者様を公衆の面前で振るわけないさ」みたいな視線がチクチクと！

そして、そんな空気を王様までもが読んだのか、
「そういえば、勇者殿の方はどうなったのさ？」

なんてことを玉座で言ってくれちゃったではありませんか！

広間にいる人達のほぼ全員の視線が、私と勇者様に向くのが分かりました。

ピンチです。

私は勇者様に手を取られたまま、顔と背中に冷汗がダラダラと流れていくのを感じました。
間違いない生まれてこのかた一番の危機です。窮地です。

私の本音としては、この求婚を綺麗さっぱりお断りしたいです。

だって勇者様ですよ？ 女神から宣託を受けて魔王を倒す使命を負った、そしてそれを見事成し

遂げた英雄ですよ？

ただの子爵令嬢で、容姿も能力も平凡そのもの。広間で集っている侍女に交じればすぐ埋もれる、記憶の端にも残らないモブの私と……結婚？

あああ、無理！ どう考えても無理です！

他の誰が許しても私は許しません。勇者様の隣に自分みたいな女が並ぶことを！

これは絶対絶対お断りしなければなりません。ぶっちゃけると、不相应な事態は面倒に決まっますからね。

でも、これ、断れるのでしょうか……？

私は必死で考えました。

断ったらどうなるのでしょうか。

もし嫌だなんて言ったら——私は国中の総スカンを食らうでしょう。これは間違いないです。

だって、私が勇者様の妻に納まれば、この国は勇者様と確かなつながりができますから。

女神の祝福を受け、魔族を倒す力を持った勇者様とのつながりは、他国に対して政治的にも有利に働くでしょう。

だからこそ、王様や大臣の方々は当初、ルイーゼ姫様を勇者様に嫁がせようと思っていたのです。勇者様はその出目に関係なく国益をもたらす存在なのですから、勇者様が貴族でもなんでもない一般庶民の出であっても問題ではないのです。

まあ、姫様はエリューシオン公国の王族と結ばれることが決定したので、別の方面から国益が生

まれたことになりましたがね。

でも、それは置いておくとしても、勇者様とも依然としてつながりが欲しいところなのは変わっていません。そんな勇者様を振ったなんてことになったら……

想像するだけでお先真っ暗です。

かと言って、勇者の妻になる自分を想像しても、お先真っ暗な気分になるのはどうしてでしょうか……というか想像つきません、そんな私。

困りました。最大級に困りました。断れません。

でも勇者様の求婚は受けたくありません。

「アーリア」

私を見つめる瞳の甘さの中に一瞬だけ焔ほのおを宿した勇者様が、いきなり私の名前をその唇に乗せました。

声は大きくはありません。ですが、なぜか広間中にその涼やかな声音が響き渡ったように感じられました。

「改めて言わせて下さい。貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」

……どうして今になって空気を読むのですか、グリード様……

注目の的になっている中で再度求婚するとは……

あれですね、絶対わざとですね！ 狙って言ってますよね、私が断れないように！

前にも増して汗がダラダラ出てまいりました。

そんな折、縫いとめられたように勇者様から視線を外すことができないうる私の視界の端に、勇者様の仲間達が彼の背後から一生懸命……というより必死の形相で私に向かって手を合わせて拝んだり目配せしたり、念を飛ばしているのが見えました。あの冷静そうなりユファス様ですら同じようなことをしています。

残念ながら魔力ゼロの私には、彼らが伝えようとしていることを明確に知ることはできません。

ですが、どうしてでしょうか。私にはなぜか「断らないでくれ！ この国が滅びてもいいのか！」と懇願しているように感じられました。

……そうです。空気が読めるのです、私。

何だか分かりませんが、滅亡フラグまで立っている模様です。

困りました。ますます断れないじゃないですか！

私はグルグル考えました。

その時、ふっと、頭の中で我がミルフォード家の家訓を思い出したのです。

……もう、これに従うしかありません。

私はすうっと息を吸って口を開きました。

「勇者様……」

周りの人たちが固唾を呑んで私の返事を待っているのが感じられました。

ですが、勇者様一行はなぜか女神に祈っているようです。

グリード様……貴方は一体どういう方なのでしょうか。私の中で疑惑が芽生えました。

しかし今はそんなことを考えている場合ではありません。

疑惑は頭の片隅に置いておいて、私は意識を目の前の勇者様に戻して恐る恐る返事を口に乗せました。

「……私は勇者様のことをよく知りません。グリード様も私のことをご存じないと思います。ですから、返事はお互いのことをよく知ってからということでもいいでしょうか？」

これぞ、ザ・先送り！

我がミルフォード子爵家の家訓の一つ「難しい問題が起きたら先送りにすべし！」です。

私はややがっかりな空気が蔓延する広間の中、じっと勇者様の反応を窺いました。

勇者様は感情の読み取れない眼差しで私をじっと見下ろしていましたが——やがて何を思ったのか、不意にふわりと笑みを浮かべたのでした。

とたんに私の背後にいる侍女仲間が「キャー！」と黄色い声を上げました。

美形の笑顔はもはや兵器ですね。私も一瞬虚を衝かれたような気がしましたよ。

そんな喧騒の中、勇者様は頭を下げて私の手の甲にキスを落としました。

ひい。

またもや背後で黄色い声が上がります。

そうですね、その優雅な所作はまるでどこかの王子様のようなものですものね！

「もちろんです。私も貴女のことを知りたいし、私のことを知ってもらいたいです」
金色に淡く輝く前髪の間から覗く海色の瞳で、私を射抜きながら――

そんな素晴らしい紳士的な姿を見ながらもゾワツと背中に悪寒が走ったのは、気のせいだと思いたい私でした。

5 最強の勇者にして最凶の勇者

この世界を創造したのは、光の女神レフェリアと闇の神アーティラートの夫婦神でした。

彼らが新しい世界を創るにあたり最初に生み出したのが、水・土・風・火に光と闇の六種族の精霊王です。

精霊王たちは光の女神と闇の神と共にその力を使って世界を創り上げていきました。

つまり、精霊王は神の眷属であり、この世界を構成する存在なのです。

この六種の力は世界の根幹を成す力であり、世界を巡く流れなければならないのですが、精霊王達六人だけで世界全域に力を循環させるのは難しかったようです。

彼らは自分たちの力の欠片から、眷属を誕生させて世界に配置しました。

それが精霊です。精霊の力が世界を巡って循環がうまくいくようになりますと、創世の女神と神は世界に生命を誕生さ

せました。植物、動物など私たちが知っている生き物です。

女神と神、そして彼らの子供である精霊王たちは相談しあって、最後に自分たちの姿に似た生命を世界に誕生させました。それが私たち人間です。

しかし、人間を創造した時に力を使い果たした闇の神アーティラートは、永遠の眠りについてしまいました。

光の女神レフェリアはそれを悲しみました。その嘆きから誕生したのが魔族です。魔族の目が例外なく赤いのは、嘆きの涙から誕生したからだと言われています。

嘆きの存在である魔族は世界の嫌われ者になりました。

そして、世界のすべてに祝福されて誕生した人間を憎み――その時から魔族と人間の対立が始まったのです。

『こどもに聞かせる世界創造神話』

* * *

「前回ここを発ってから一カ月足らずか……」

ふかふかのソファに座りながら女盗賊のミリーは感慨深げにつぶやいた。

広間での騒動のあと、別室でシュワルゼ国王たちに歓迎された勇者一行は、しばらくの間ゆっくり休養できる個室と居間を与えられた。現在はそこに六名全員が何とはなしに集っていた。

「まさかこんなに早く魔王を討伐して帰ってこれるとは思わなかったわ」「そうだね。僕もここを発つ時はそんなこと想像もしてなかったよ。もっとも、あの時はみんな動揺していたから、そこまで頭が回らなかつたというのが実情だけど」

そう答えたのは、ミリーの隣に座っている神官のレナスだ。

淡い緑色の髪に黒い瞳を持つ、司祭の中でも「白」という高位の地位にある神官で、一行のムードメイカーでもあった。

「いろんな意味で疲れる一カ月だったよね」

その時のことを思い出しているのか、ため息をつきながらレナスは遠い目をした。

誰もがその感想に共感したらしい。一同の視線は窓側で佇む、疲れを生み出した元凶へと向かった。だがその元凶である勇者グリードは、そんな視線をまるで意に介さず、ただただ腕を組んだまま窓の外を眺めている。

その横顔には、何の感情も浮かんでいない。ただ人形のように無機質な横顔がそこにあるだけだ。広間で見せた甘い微笑みも、愛しそうな表情も今はなく、それらはまるで夢か幻想だったかのようだが、この無表情こそグリードのデフォルトなのだ。

レナスたちに言わせれば、広間でのグリードの方が夢、しかも悪夢のようなものだ。

そして彼らはこの一カ月、ずっと悪夢を見せられていたに等しかった。

いや――

「今も悪夢が続いている気がする……」

レナスのつぶやきは全員の心のうちを表していた。

悪夢の始まりは一カ月前、シュワルゼ国のこの城に到着した時、グリードがとある侍女に一目惚れしたことだった。

今まで異性への好意どころか他人に興味すら示さなかつたグリード。

戦いのパーティである前に友人でもある六人。普通なら、友の身に起こったことを微笑ましく祝福したことだろう。

だが、相手はグリードだ。歴代最強の勇者にして、最凶の勇者である彼が――恋。恐らく、初恋。

彼らはそれを天変地異の前触れだと思った。そしてその予感はある意味正しかつたと言える。きっと魔族でさえ気付いていないが、世界の命運がたった一人の女性の手に委ねられたのだから。

彼らの脳裏にこの一カ月のことが蘇った。それは戦慄と悪寒と苦悩に彩られた日々だった。

* * *

「少し出掛けてきます」

ルイーゼ姫を救出するべく城を出発し、シュワルゼ国の東にあるミアナと呼ばれる大きな街に來た一行は、高級でもなくみすばらしいわけでもない中級の宿に部屋をとった。

そこでこれからの方針を話し合ったり、旅の準備をするのかと思いきや、リーダーであるグリードは宿に着くなり一人宿を出て行ってしまった。その無表情で淡々とした口調はいつものことだった。

残されたメンバーは示し合わせたわけではなかったが、宿の食堂の一角に集った。まだ食事時ではないため、客はほとんどいない。話し合う環境としてはまずまずだ。

だが、誰も重い口を開こうとはしない。その上、みな一様に戸惑ったような表情だった。

実はここまでの道中も彼らは同じ有様だった。いや、正確に言うと、シュワルゼの王城に着いた時からこの状態だ。

王や重臣たちの前では取り繕っていたが、かなり困惑していた。いや、今にも頭がショートしてしまいそうだったと言っても過言ではない。

彼らは先ほど自分たちの目で見たものが信じられなかったのだ。実を言うと、今でも信じられない。

グリードが、女性にあんな風に微笑みかけるなんて。あんなやさしい言葉をかけるなんて。しかも抱きしめていた。これに驚かなくて何に驚くというのだ。

普段とまるで違うグリードの態度。あれはもしかして、もしかしなくても——恋だろうか。そう思った彼らの頭は混乱でいっぱいになった。

恋！……あのグリードが？

無表情、無感動。まるで人形めいたあの男が、恋？

……彼らの思考はそれ以上考えるのを拒否していた。

それにまだ本人の口から聞いたわけじゃないのだ。何か理由があるのかもしれないし。

そう結論づけた彼らだったが、城を出てからここまでの道中、グリードをちらちらと窺^{ひが}うだけで聞きたいのに聞けないという有様だった。

『グリードが恋なんてありえない！』

『でもそのあり得ないことが、本当に起きているとしたら？』

全員、内心で思っているのは同じことだった。

そして一行に奇妙な緊張感を生み出している原因が目の前から消えて、ようやく彼らはそのことについて話をする機会に恵まれたのだった。

「やっぱりあの女性に恋をしたんだろうか……」

難しい顔をして魔法使いのリュファスが重い口を開く。

「信じられないけど、そうとしか思えないわ！ 何あの笑顔！ 終末が来たのかと思ったわ！」

と女盗賊のミリーが言えば、鮮やかな黄金の髪と落ちていた色合いの灰青の瞳を持つ女戦士の

フアラが頷く。

「ああ。芝居や演技とは思えなかったしな。信じられんが……本気で恋をしたのかもしれん」
「……私としては面倒なことに巻き込まれたくないので、気のせいであってほしいのですが」
重いため息まじりに言ったのはエルフのルフアーガだった。

「残念ながら——」

上空に視線を向けていた神官のレナスが言った。

「グリードが彼女のことを好きなのは確かだよ。精霊たちがそう言っている」
レナスは精霊の加護を受けた勇者の子孫であるため、精霊の声を聞くことができる。

グリードほどはつきりと姿が見えたり明解な意思疎通ができるわけではないが、彼らの言っていることはわかるし、その気になればこちらから働きかけることもできるのだ。

そこでグリードの心の動きに敏感な精霊たちなら分かると思いい、精霊に問いかけたらしい。

「今も、彼女に贈る腕輪を注文しに行ったらしい。この街には名工がいるんだってさ」

「腕輪……」

彼らの間に衝撃が走った。

「もう贈り物攻勢か!？」とリュファス。

「いや、でも早くないか？ 出会ったばかりだろう？」とフアラ。

「しかも、件の女性とはちよっと話をしたただけだったわよね？」とミリーが言い、レナスは遠い目をしてアハハと乾いた笑いを浮かべて「どうもそれが対の腕輪らしいんだよねー」と言った。

「対の腕輪!？」

全員がハモっていた。そして直後、いっせいにドン引いた。

出会ったばかりの女性に、対の腕輪——すなわち婚約腕輪を用意する男。

……恐い。恐すぎる。

色々なことをすっ飛ばし過ぎだ！ とくに相手の気持ちをも！

「もうこれで決定ですね……」

疲れた顔をしてルフアーガは断言する。どこか怯えているようにも見える。

ルフアーガはエルフだ。外見は銀色の髪と同色の瞳を持つ美少年だが、ここにいる誰よりも年上で長生きをしている。

勇者一行の導き手であると同時に、監視役という役目を背負っている彼はいつでも冷静だった。——そのはずだった。

いつも超然とした態度を崩さないルフアーガでさえこうなのだ。他の面々は戦慄していた。

でもそれはグリードが恋をしたことではなく、それによって明らかになったグリードの性質の一端に、だ。

何に対しても心を動かされる様子ではなかったグリード。何にも執着しない、特別な思いを抱かない男。

それが誰かに特別な思いを抱いたとたん、思いっきり斜めうしろの方向に暴走し出した。

「なあ、もし彼女が既婚者だったり恋人いたりしたらどうなるのかな……」

レナスが顔を引きつらせながら言った言葉に、全員が一瞬にして青ざめる。

そのいるかどうかも分からない旦那か恋人が、闇にまぎれて消されるであろうことは確実だったからだ。

腕輪を用意したということは、何が何でも彼女を手に入れるつもりなのだろう。彼女が不憫ではあるが、グリードを止められる者はここにはいない。

なぜならグリードは歴代最強の勇者と言われる存在だからだ。

最強と同時に、最凶の勇者でもあるけれど。

高い魔力を持ち、女神から勇者としての力を授かった人間。さらに人類史上例のない全種族の精霊から【精霊の加護】も受けている。

——その気になれば世界をも滅ぼせる。

とくに【精霊の加護】がヤバイ。

精霊は世界に遍く存在する自然そのものの力の具現だ。

水・土・風・火・光・闇を司る彼らは、まれに気に入った人間に加護を与えるという。

それが【精霊の加護】。精霊が己の力を使って身を護ったり時には力を貸してその人間に精霊の力を使わせたりするスキルだ。

だが当代勇者であるグリードに与えられた【精霊の加護】は通常のものとは違う。

いや、グリードの力が【精霊の加護】を進化させたといってもいいだろう。

彼は精霊の力を、精霊の意思に関係なく引き出して自由に使えるのだ。また精霊の方も忌憚なく彼にその力を委ねている。

精霊は世界を構成する力そのものだ。つまり、その力の使い方によっては世界を滅ぼすことも可能なのである。

そんな彼を止める？ 無理無理無理。女神、精霊王クラスでなければ不可能だろう。

彼らにできるのは、被害を最小に抑えるように努力することだけだった。

……なんか、ゴメン。すごくゴメン。

相手の女性（と架空の旦那or恋人）に、彼らは心の中で謝罪した。これからのことを想像すると、そうせずにはいられなかった。

あんな勇者でゴメン、と。

だが、ひとしきり謝った一行は、そこでふっとあることに気付いた。

——誰も彼女の容姿を覚えてなかったことに。

「えっと……茶色の髪だったわよね……？」

ミリーが首を傾げながら言う。

「精霊が言うには瞳も濃い茶色をしている、らしいよ」

とレナスが何かを確認するように視線を空に動かす。

「グリードが抱きとめた時の身長差から言えば、小柄なようですね」とルファアガ。

「広間にいた時にルイーゼ姫の侍女だと言っていたな」

そのファアラの言葉に頷いたのはリュファスだった。

「ああ。姫の第一侍女で、姫が攫われるのを目撃したのも彼女だ。だが……」

言葉を濁すリュファス。彼の「だが……」に続く言葉は口に出さなくても分かった。

よく覚えていない、だ。

そうなのだ。グリードの態度にあまりに驚きすぎていたせい、誰も彼女の容姿をはっきりと思えないのだ。

彼らはバカでも忘れっぽいわけでもない。むしろ記憶力はいい方だ。

なのに、誰ひとり明確にグリードの想い人を思い描くことができないとは……

「と、とにかくすごく普通っぽかった」

とレナスが冷汗をかきながら言った。

思い出そうとしても、茶色の髪に小柄な侍女服をまとった女性の、おぼろげな姿しか思い浮かべられない。

「そうそう。あら、普通の女の子だ、と思ったのよね」とミリー。

「普通で、あまり特徴がなかったような気がする」とリュファス。

「不細工というわけではなく、可もなく不可もない目立たない感じの容姿だったと思います」とルファアガ。

「あれだな、特徴がなさすぎて覚えてないのだと思うよ。太っているとか痩せているとか、口が大きい、小さいとか何かしら特徴があれば、マイナスイメージであっても記憶には残っていると思うが、彼女は……」

ファアラが眉を顰めながら続けた。

「そのどれでもなくて、すべてにおいて平均。だから印象に残らなかったのかもしれない」

ある意味、誰の記憶の端にも残っていないというのは逆にすごいことかもしれない。

だが、それはそれで大問題だ。彼らにとっても重要な人物になるであろう彼女の、顔が思い出せないとは。

——グリードの初恋の相手なのに。

……初恋。

その単語を脳裏に思い浮かべた瞬間、全員が地味に精神的なダメージを受けたのは気のせいだろうか。

「グリード」と「初恋」。なんて似つかわしくない言葉だろう。

勇者の幼馴染でもあるレナスは、失礼にもそう思った。

いや、それより今はグリードの想い人の存在をつきとめなければ、世界の命運をある意味握っているかもしれないのに。それなのに――

「ヤバイよ。僕、次に会った時、わかるかどうか怪しい」とレナスが頭を抱えて言うのと、リュファスも頷いた。

「下手をすれば、すれ違ってもわからないかもしれない……」

彼女が話した魔王の姿形なんかは覚えてるし、その声もちゃんと耳に残っている。だから声を聞けばわかるかもしれない。だが……

「顔が明確に思い浮かばないのは辛いな。別人と間違えそうだ」
参った、という風にフアラが肩をすくめた。

そう。あまりの特徴のなさに、そこら辺にいる街娘が彼女だと言われればそうだと思いますし
まうだろう。

グリードに知られないように接触を図ろうと思っていたのに、これでは叶いそうにないではないか。

――その時だった。

一同のやり取りを眺めていた精霊の一人が、くすくす笑いながらレナスに告げたのは。

「あ、風の精霊が教えてくれた。名前はアーリアだそうだ。独身で恋人もなしだって……よかった」

一行は安堵の息をついた。これで罪なき人が闇夜で葬り去られることはなくなったのだ。

あとは、彼女に何が何でもグリードと一緒になくてもらうだけだ。

人権無視？

いや、それより世界の平和だ。いや、世界の存続だ。

「それにはまず、顔を把握しないと」

リュファスの言葉に全員頷いた。

「いくらなんでもグリード本人は分かるだろうから、次会った時は頭にたたき込もう」

これにも全員が頷いた。

魔族に恐れられている勇者一行とは思えないような会話だが、彼らは本気も本気だった。

ルファアガが眉を蹙めて言った。

「それにしても、私たち全員が覚えてないなんて。もしかしたら彼女はその手の特殊スキルを持っているのかもしれないね」

「【隠密】？ いや、もっと別の形で認識できないようにするスキル、か？」

リュファスも難しい顔になる。

彼らはスキルに関して詳しい方だが、それでも全部を知っているわけではない。

中には非常にマイナーだったり、あっても効果の疑わしいスキルがそれこそ山のようにあるから

だ。

「とてもスキル持ちには見えなかったが、そうでなければ説明はつかないだろうな。さすがグリードが選んだ人というわけか……」

ファアラが納得したように頷く。

「顔で選ばないとところがグリードらしいわね」とミリー。

「そうだな。普通に見えて、普通じゃない侍女さんか……」

さつきから可笑しそうに精霊たちがぐすくす笑っているのを怪訝に思いながら、レナスも頷いて言った。

——顔を見ただけよく覚えていない。

実はそれはモブの特徴に他ならないのだが、準主役に相当する役割を担う彼らはそれを知らなかった。

先日泊まった宿屋の主人を覚えているか？

食料を買った店の主人の顔を思い出せるか？

食堂で給仕してくれた女性の顔は？

答えは——NOだ。

彼らの顔を一度は見たはずなのに、記憶に残っていない。なぜならそれは彼らがモブだからだ。

モブについて深く考えることなどこれまででなかった彼らは、「顔を見ただけなのに思い出せない」なんて人間がいることにさえ、今まで気付いていなかった

* * *

時はふたたび衝撃の勇者求婚後。

城の居間に集まった彼ら一行は、ふわりと部屋の空気が動くのを感じた——精霊だ。

「ああ、どうやら新聞記者たちにあの侍女さんの存在を嗅ぎつけられたようですな」

その「声」は同時にグリードにもレナスにも届いたが、精霊の言葉の口にしたのはエルフのルフアーガだった。精霊王と人間の間に生まれた子供を祖先に持つエルフにも、精霊の声が聞こえるのだ。

士官のレナスも頷いて、他のメンバーに分かりやすく説明した。

「今、風の精霊が教えてくれた。勇者がアーリアに求婚したことを、城の下働きから新聞記者たちが聞き出したらしい。記事になるのも時間の問題だね」

「下働きか……そんな所にまでも噂が広まってるのか」

眉を顰めたのは魔法使いのリュファスだった。

自身も王族である彼は、城の広間に集っていた人間が、ある程度の地位にある人たちのみであったと知っている。

小さい城とはいえ、働いている人間の数は膨大だ。末端の人間は広間に入ることはできない。なのに下働きにまですでに話がいつているとなると、恐るべきスピードで噂は伝播していくことになるだろう。

「思った以上に早く彼女の存在は知れ渡ってしまっうな……。相変わらず鬱陶しい連中だ」
ため息混じりに言ったのは女戦士のフアラだった。

そんなフアラに、女盗賊のミリーが苦笑しながら言った。

「仕方ないわよ。それが連中の仕事だもの。彼らも必死なんでしょう。何しろあたしたちから魔王討伐についての詳細な情報が得られないんだからさ」

「魔王討伐……」

レナスがボソッとつぶやく。

「言えるわけないよね……。あんな無茶苦茶なこと」

全員がその意見に頷いて、相変わらず窓辺に佇んでいるグリードに視線をやった。

歴代の勇者が何カ月——いや、場合によっては年単位の歳月を費してようやく成し遂げることを、この勇者はショートカットしまくり、わずか半月ほどで済ませてしまったのだ。

すべての手順もセオリーも無視して。

こんなことは絶対に言えない。いや、言ってはならないのだ。

——次の世代の勇者たちのために。

* * *

そもそも歴代の勇者一行が宣託を受けた後、なぜすぐに魔王討伐に向かわなかったのかといえは、もちろん鍛錬して力をつけなければならぬということもあるが、魔王の下にすぐには赴けない理由があったからだ。

それが魔王配下の幹部たちの存在と、魔王の居住する城が一定の期間で移動してしまうことだった。

ルイーゼ姫が攫われた時、魔王城はシュワルゼの近くに存在していた。だからこの国はすぐに魔王城へと兵を派遣できたのだ——もともと、魔族の妨害にあつて城にたどり着くこともできなかったようだが。

だが、姫が攫われてしばらくすると城は移動してしまった。

どこに行ったのかも分からない。だからこそシュワルゼは勇者に頼らなければならなかったのだ。

依頼を受けた勇者一行はまず移動しながら、魔王城の位置を含めた情報を集めた。

情報屋や冒険ギルドや精霊の力を借りて。

その結果、レイクサリダという国とミンダルクという国の国境にあるバルルド山脈に移動したことが判明した。

だが場所は分かってても、次なる問題が発生した。

魔王城は幾重にも結界を張っていたのだ。

その結界は魔王配下の七大幹部たちがそれぞれに作り上げたもので、城に侵入するためには幹部を全員倒す必要があった。

倒さなければ魔王城への道が開かれない。

だが、幹部たちの居場所を把握するのは、実は魔王城の位置をつきとめるより難しい。巨大な魔王城と違って幹部たちは単独で、しかも気ままに移動してしまっただ。

グリード一行が今まで倒した幹部はこの時点で四人。あと三人の幹部の居所を探して倒さなければならなかった。

歴代の「普通の」勇者であれば、地道に魔族の幹部を探して根気良く旅を続けただろう。実際、その方法しか魔王城の結界を無効にする方法はないのだから。

だが——最凶の勇者であるグリードはその手順を無視した。

「待てない、今すぐ魔王城を攻略する」と宣言したのだ。

「ルイーゼ姫が攫さらわれて一カ月は経つ。これ以上回り道をしていたら、姫の精神が持たない」
もっともらしいことを述べているが、実際は姫のことなんて、まったく心配していないのは明らかだった。

「壊れた姫を連れ帰っても、彼女は喜びませんから」

——そっちの方が本音だろう、グリード？

「だから一刻も早く助け出さないと」
——お前が単に一刻も早く彼女の所に帰りたいっていうだけだろう？ 城には恋のライバルがいるから！

一行はそう思いはしたが、誰一人グリードに意見をする勇氣は持たなかった。

誰が赤い布目指して突進する猛獣の前に飛び出したがるだろうか。

「……まあ、今なら魔王も油断しているでしょうし、魔王を含めた城に存在するすべての魔族の魔力が消失してくれば、だいた世界が安定するでしょうしね」

というエルフのルフアーガのため息交じりの意見もあって、全員が諦あきらめの境地で覚悟を決めた。

こうして勇者一行はショートカットしまくって、強行突破という名の魔王討伐あそびに赴おもむくことになったのだった。

——魔王城攻略は無茶ふりと非常識の連続だった。

レイクサリダ側の国境近くの街には、幸いなことに行ったことがあった。そのため彼らは魔法を使つてそこまでは簡単に移動することができた。

だが街からバルロード山脈にある魔王城までは徒歩で行くことになる。

移動の魔法陣は術者が認知している場所にしか飛ばないし、魔王城のお膝元で魔法など使つたら発見されてしまうからだ。

険しい山道が続くが、地の精霊が安全な近道を教えてくれるのでそれほど苦ではない。

——国境近くの街を発つて三日目。

彼らは魔王城が見渡せる場所まで来ることができた。

魔王城は山の頂たかねではなく、人目を避けるように溪谷の深い森の中に存在していた。

とはいえ移城の際に木々が吹き飛ばされたのか、それとも大地の精霊が魔族を嫌ったのか、城とその周囲にだけは緑は存在しておらず、ポツカリと土が露出している状態だった。

その魔王城を取り囲むように深い森が生い茂り、不可思議な霧きりでその姿を周囲から覆おほい隠している。

魔王の城自体はそれほど大きくはない。シュワルゼの城と同じくらいだ。

シュワルゼの城は白亜の色だが、魔王城はそれとは対照的に全体的に黒っぽい色をしていた。

灰色の岩に囲まれた正門の扉にも、真つ黒な木が使われている。その様子が人の目におどろおどろしさで威圧感を与えていた。

神官のレナスが城を囲む魔族の結界の外に、神聖魔法で結界を施す。風の精霊が城の周囲に配置したリーリスの花を基点としたものである。

リーリスは女神レフェリアを象徴する薄紅色の花だ。神聖魔法とは相性がいい上に、魔族は神聖魔法をなぜか嫌う。だからこの結界は二重の意味を持っていた。

結界の中で起きたことを魔王配下の幹部たちに気取られないようにすることと、中の魔族たちを閉じ込めることができるのだ。

「僕が結局一番無茶振りされたよね……」
レナスがそうぼやいたのも無理はない。

この勇者は魔王城と、魔族たちが張った城を守る結界ごと、レナスに神聖魔法による結界で覆おほわせたのだ。

魔王城の結界に穴をあけても幹部が気付いて魔王の下へ駆けつけられないように、そして魔王城にいる魔族を逃がさないように。

元はエルフが考案したとも伝えられている神聖魔法は、攻撃ではなく護まもりに特化した魔術だ。だ

が、なぜか魔族は苦手としていた。

神聖魔法には彼らの魔力の核を揺さぶるような韻^{リズム}が含まれているからだ。

魔族は肉体という容器に魔力を詰め込んでいる存在と言っても過言ではないほど濃密な魔力を有する。

なぜ容器が必要かという点、魔力だけでは溶けて消滅してしまうからだ。

だから魔族は自身の核である魔力に、保護するように容器、つまり肉体を魔力で形成させて身に戻っているのだ。

その命そのものと言える魔力の核が揺さぶられるということは、存在が危険にさらされるということ。

それゆえ、魔族は神聖魔法を嫌う。

だからこそ神聖魔法で結界を作り出して城を覆^{おほ}うことは有効だった。

「僕、もう魔力ほとんど空だよ……」

城を取り囲むほどの巨大な結界を張ったレナスの顔は蒼白だった。

これほど大きな結界を張ったのは初めてのことだった。

だがレナスのように高位の神官だからこそ成し遂げられる技で、その彼ですら生成に大部分の魔力を持っていかれた状態だ。

「あとは僕の方でフォローします」

慰めるようにレナスの肩を叩いたのは、エルフのルフアーガだった。

彼らを尻目に、そんな無茶振りをした張本人の勇者グリードは、魔力を持っている者にはシャボン玉の表面のような膜に見える、魔族の幹部の張った結界を静かに見つめて言った。

「攻撃するのでリミッターを外します」

言った傍^{そば}から結界が軋^{しん}んだ。

「ああ、なるほど。精霊の力を使って、城の結界の内側からも圧力をかけているわけですか」

軋^{しん}む結界とグリードをじっと見つめていたルフアーガは苦笑した。感心しているようでもあり、呆^{あき}れているようでもあった。

彼がこんな表情をするのは珍しいことだ。

それだけこの結界破りは常識外れのことだったのだろう。

——そう。非常識なのは、最強の勇者であるグリードだった。

生き残りの幹部の数だけ重なった魔王城の結界に、あろうことか結界の外側からリミッターを外したグリードが、そして結界の内側からは精霊たちが攻撃を仕掛けたのだ。自分の力と、自分に同調させた精霊たちの力を一点に集中させて力をぶつけたのだ。

魔王城の結界が対人間のもので精霊には無効だったこと、そして常日頃から精霊と力を同調させ

ていたグリードだからこそできた技だった。

グリードの持つ魔力、全種族の精霊の力、そして女神から授かった勇者としての力。

その三つの力を内外から一点にぶつけられた魔族たちの結界は、その力の前に——あっけなく霧散した。

歴代の勇者の長い戦いの旅は一体なんだったのかと思わせるくらい、本当にあっけなかった。

「こんなことでもいいのかな？」

と、あまりのあっけなさに、グリードとルフアーガ以外の一同が首をひねってしまうほどだった。もっとも、後にルフアーガが重い口を開けて言った言葉に、全員が震撼したわけだが。

「あの瞬間、世界が一瞬転むくらいの、ものすごい「力」があそこに集中していました。アレに耐えられる結界は——存在しません」

でも、とレナスは窓に佇んで何の感情も映さない、最強の勇者の横顔を見ながら思った。

本当に震撼させられたのは、魔王を討伐した直後に言った、グリードの言葉だ——

恐らく、あれがすべての始まり。

* * *

「お寛ぎの所、失礼します。私はこの国の宰相を務めております、ルース・ハイリンガムという者です」

悪夢のような魔王討伐のことを思い返していた勇者一行は、背の高い眼鏡の男の訪問を受けた。

「このたびは姫様を救出いただき、ありがとうございます。たいしたおもてなしはできませんが、できる限りのことはさせていただけますので、遠慮なく仰ってください」

部屋に入ってきて柔和な笑顔を浮かべるその男は、宰相にしては若かった。

だが、広間でも、そして先ほど行われた王を交えての話し合いの時も、常に王の傍らにいて場を取り仕切っていたのはこの男だ。

栗色の髪に珍しい琥珀色の目、勇者一行と並んでも遜色ない容姿。歳の頃は三十代前半といった所だろうか。

だが、その落ち着いた物腰はさすがに一国の宰相をしているだけあって、静かな迫力に満ちていた。

「ありがとうございます。しばらくの間、お世話になります」

ルフアーガが一同を代表してそう応じた時だった。

それまで窓の外を無表情に眺めていたグリードが、振り返って口を開いたのは。

「宰相殿。頼みがあります」

広間でアーリアに見せていた顔とはまるで違う無表情だが、宰相は意に介さずにこやかに応じた。

立ち読みサンプルは
ここまで

「何でしょうか。私にできることならなんなりと」
「彼女のお父上に連絡を取りたいのですが、ここからミルフォード子爵領まで早馬でどのくらいかかりますか？」

「……ほう。ミルフォード子爵領に、ですか？　そうですね、あそこなら早馬を走らせて片道で三日、往復で六日という所でしようね」

軽く目を見張りながら宰相は答えた後、グリードに少し探るような視線を向けた。

「失礼ですが、ミルフォード子爵に連絡を取る理由を伺っても……？」

「ええ、リュファスから聞いたのですが、貴族は本人より先に父親に結婚の許可をもらう必要があるそうですね。その慣例にのっとって、まずは彼女の父上の意向を確認したいと思ひまして」

「なるほど……」

宰相は眼鏡の奥でその目を細めて数秒の間何かを思索した後、にっこりとグリードに微笑みかけた。

「それでしたら、私が力になれると思います。ミルフォード子爵と私、そして王家付き魔法使いのフアミールは旧知の仲ですから。それに——私は彼女の城での身元引受人でもあります」

「なるほど、ではあなたと話をするのが一番手っ取り早いということですね」

そう言つて椅子から立ち上がったのはエルフのルフアーガだった。

——ああ、ほら出たよ、来たよ。

と、この時グリード以外の勇者一行は同じことを思った。

そんな周囲の視線を尻目に、ルフアーガは宰相の目の前に移動して彼を見上げた。

十四、五歳くらいにしか見えない少年の姿のエルフト、背の高い眼鏡の男。彼らの視線が交わり、相手の思惑を探るように見つめあい——何か思うところがあつたらしい。

宰相はふつと眼鏡の奥で小さな笑顔を浮かべて言った。

「あまり人に聞かれないほうがいいお話のようですね。では別室に移動して伺いましょう」

「ええ、お願いします」

笑顔で応じるルフアーガ。

どうやら絶好の交渉相手を見つけたようだ。

いや、交渉相手というより……協力者だろうか。

そして宰相とエルフは二人連れ立って居間を出て行った。

「それでは勇者殿、書簡についてはまた後ほど」

そうグリードに言葉を残して。

二人が出て行った後、ふたたび視線を窓の外に向けてしまったグリードを見やる残りの面々の顔色は冴えない。

今は嵐の前の静けさだ。